

(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

南アフリカ、ケニア、エジプト、ガーナとアフリカ四カ国を駆け足で回った。総計で五万キロほど。アフリカ大陸を南北、東西に移動した。

内閣府のアフリカ科学技術ミッションの一環。昨年横浜で開催されたアフリカ開発会議で、日本はアフリカ諸国との間で科学技術協力をやっていくことを発表した。協力の種をまきに、あるいは拾いに行くことを目的としたミッションであった。この話はいずれ書くとして、今回は帰国後の話。

帰国後、私はその足で上野の国立科学博物館(科博)へ行った。そこで行われている長崎大学の特別展示「熱帯感染症と『たたかう』アフリカの自然・開発・そこに住



やまもと たろう  
山本 太郎

私にはわからない

む人々」を見るためだ。しかし、月曜日だということをつっかり忘れていた。上野にあるすべての博物館、動物園は休館、休園だった。あてもなく上野の山を歩いた。そ

こで野口英世の銅像に出会った。以前、文京区に暮らしていたこともあって谷中、根津、千駄木から上野、そして根岸から浅草の辺りはよく歩いた場所だった。にもかかわらず、上野の山に野口の銅像があるとは知らなかった。野口こそ、八十年以上も前にアフリカで科学技術協力の種をまいた、あるいはまこうとした日本人だった。台座に文字が見えた。「pr

o bono humanigeneri 人類の幸福のために」とラテン語が刻まれていた。休館日ではなくては出会うことがなかったに違いないこの言葉。野

口は異国ガーナの首都アクラ近郊で「私にはわからない」と言い残して研究の途上、逝ったという。一九二八(昭和三年)のことだ。日本では二十五歳以上の男子を対象に初の普通選挙が行われ、中国では蒋介石が国民政府の主席に就任した。ニューヨークではテレビ定期放送が開始された年でもあった。上野で野口の銅像と出会ったことは、ガーナから帰ってきたまさにその日の偶然だった。

その週末、再度上野に出掛けた。吹く風はまだ冷たかったが、空には春のにおいがした。上野は人々であふれていた。科博で行われていた長崎大学の特別展示も入場者がその日、一万人を超えたと聞いた。(長崎大熱帯医学研究所教授)